

木村敏氏のコメントに答えて

村瀬雅俊

小論の結論は、次の三点に要約できる。

(Ⅰ) 西田幾多郎の《在ることは、働くことであり、知ることである》という主張は、マンダラとして表現可能であり、それは生命シンボルとしての「自己・非自己・循環原理」と一致する。

(Ⅱ) 《マクロの世界で起こることは、ミクロの世界でも起こり、こころの世界でも起こる》という一般法則が成立する。

(Ⅲ) いわゆる「分裂病」は、マンダラの「解体」、あるいはマンダラの「統合障害」として理解可能である。

このような内容の小論を『講座・生命』に寄稿させて頂いた上に、分裂病を長年研究してきた木村敏氏から、それに対して過分のコメントを頂いたことに、紙面をお借りして深く感謝申し上げます。以下では、木村氏のコメントに触発されて考えたことを述べてみたいと思う。

まず、禅者である鈴木大拙の言葉を引用したい。

《「無」とか「不」とかの否定句を使うので、消極性をもっているかのように想像せられるかも知れない。こ

こに仏教や東洋思想の誤解せられる難点がある。真実は消極が積極で、否定が肯定である。これを「絶対矛盾の自己同一」というのである。否定そのものを肯定するはたらし、ここに東洋的なるものの精髓に触れることが可能になる。西田君の論理は突にこれを道破して遺憾なしである。「Aは非Aだから、それ故にAである」というところまで徹底しなくては、仏教および他の東洋的なるものの深所に手を著けるわけには行かないのである。『自由・空・只今』鈴木大拙

ここで、私が特に注目したいのは、「Aは非Aだから、それ故にAである」という「絶対矛盾的な形式論理」である。ここで、「A」を「自己」と置き換えてみると、木村氏の言う「自己が自己であるためには、自己は非自己に出会わなくてはならない」という「存在論的差異」に基づく「個別化の原理」に一致することがわかる。また、同氏は、分裂病をこの「個別化の原理」の障害として、早くから捉えていた。このことから、禅に現れているような東洋の「哲理」の中に、問題解決の核心が隠されているのではないかと考えられる。

そこで、次に、「絶対矛盾的な形式論理」の意味を探ってみよう。形式論理が矛盾をきたしてしまふのは、対立するものを一つにまとめて表現しているからに他ならない。それが、根源的には「内」と「外」の対立なのである。ここに、「観測のジレンマ」の起源があることは、小論で述べた通りである。従って、分裂病は、木村氏の言うように「個別化の原理」の障害としても、また、同氏のコメントにあるように「観測のジレンマ」の統合障害としても捉えることができるのである。なぜなら、西田幾多郎の言う「在ることは、働くことで、知ることである」という主張からもわかるように、「在ること」という「存在」と、「知ること」という「認識」の間に同形性が存在するからである。

実は、この「Aは非Aだから、それ故にAである」という絶対矛盾の形式は、その中に隠されていた「時間」を意識化することによって、「発展の原理」となるのである。ここにおいて、西田幾多郎の言う「働くこと」との

同形性が明らかになる。こうした同形性を基に、もう一度「A」を「自己」と置き換えてみよう。すると、私が生命シンボルとして提唱した「自己・非自己循環原理」と一致することがわかる。しかも、それは、小論の図5で示したようなマンダラ——すなわち、あらゆる対立物の統合、永遠の均衡と揺るぎない永続の状態——として表現できるのである。従って、「分裂病」をマンダラの「解体」、あるいはマンダラの「統合障害」として理解できるといふ私の主張は、木村氏のこれまでの主張と同形であることがわかる。

このように、「自己・非自己循環原理」に立脚した「自己・非自己循環理論」が検証されるためには、理論を構築した「自己」と同形な「他者」の出現が不可欠である。私にとつては、木村敏氏が、まさに、そのような存在なのである。

もちろん、別の検証のあり方もある。それは、「理論構築者自らが構築した理論の検証を行う」という可能性である。そのためには、「時間」の次元を意識的に導入する必要がある。具体的には、理論構築「以後」の「私」から、理論構築「以前」の「私」を眺めるという作業——すなわち、「自己」を「非自己」化する作業——を行うことである。この作業を行うことにより、理論が構築できず、何の理解も進展していなかった状況——その時点では、表面的に捉え得る「分裂」状態は一切存在しない——が、理論構築「以後」の「私」という立場から眺めた時に、はじめて「概念の統合障害」というかたちで理解できることになるのである。つまり、「事後」的に、はじめて「分裂」の形態が浮き彫りになるということである。私の「内」に「他者」を見いだすことも、私の「外」に「他者」を見いだすことも、同一事象の異なる側面に過ぎない。それは、木村氏の言う《水平的なあいだ》と「垂直的なあいだ」という同じ一つの「あいだ」の二つのアスペクトに他ならない。(小論の図4にあるように、「内向型」分裂と「外向型」分裂という二つの細胞分裂の様式が、どちらも細胞膜の陥入という同一過程の異なる展開として現れることを思い出していただと、こうしたイメージをつかみやすい)。それらが統合される時、理論は検証され、さらなる発展の段階へと進む。しかし、こうした「あいだ」に亀裂の入る余地は常につきまとう。

(このような「創造性と破壊性」の「起源と進化」は、細胞の場合も同様に生起することは、小論で繰り返し述べた通りである。) もつとも、同形の「分裂」のかたちは、異なる立場の「私」の間で、さまざまな形態を取り得ることになる。その「主観的」な症例として、精神病理学的な「分裂病」を位置づけることができると思ふ。

もちろん、「自己・非自己循環理論」の立場から言えば、「主観的」破局だけでなく、「客観的」破局も同一事象の異なる側面として表面化する。なぜなら、私の理論は、「自己」も「非自己」も「循環過程」を通して対等に取り入れており、しかも《マクロの世界で起こることは、ミクロの世界でも起こり、こころの世界でも起こる》という一般法則が成立するからである。

例えば、激しい感情——つまり、愛や憎しみ、喜びや悲しみ——に流されている時は、誰でも度を過ぎたことを言ったりするように、私達は「自己」の中に存在しながら、それと気づかずにいた無意識的な「非自己」に、思いがけず直面させられてしまうことがある。そんなとき、普段ならば拒絶できそうな訳の分からない観念さえも、一見健康そうな人々のこころを捕らえてしまう。これが、「精神的な伝染病」なのである。その起源には、ローレンツの言う「気分伝染」があることは言うまでもない。私は、小論において、「主観的」破局も、「客観的」破局も、さまざまな対立間の「分裂」として現れることを、「こころの老化」という広義の「分裂病」概念として捉えてみたのである。

このように、学問は、個別的な研究が互いに相補的に重なり合い、関係し合いながら、新たな展開へ向けて果てしなく進展する。この「学問」の本質は、「生命」の本質に他ならない。その意味では、今後、どのような理論展開を実践的に示すことができるかということも、私が構築した理論の厳しい検証となることは確かである。最後に、記号学者のロラン・バルトの言葉を引用しておきたい。

《ここでお目にかけるのは、……ある種の歴史なのだ。……私の望みは人々がそこに、ある学説がもつさま

さまの確証とがある研究の結果ゆるぎないものとされたものもろの結論などではなく、むしろ、修業時代に
つきものの信念や誘惑や試みを讀みとつてほしいということである。そこにこそ……意味が……ある。」

東洋では、「哲理」を生きることと重きが置かれていることを考えるならば、「マンガラ」を自得しつつ生きる
ことができるか否かということが、私達にとって、これからの課題ではないだろうか。

文 献

- (1) 西田幾多郎(一九三七)「論理と生命」『西田幾多郎哲学論集Ⅱ』岩波文庫、一九八八年、一七三頁。
- (2) 鈴木大拙(一九六二)「自由・空・只今」『新編 東洋的な見方』岩波文庫、一九九七年、七一頁。
- (3) 木村敏(一九六五)「精神分裂病症状の背後にあるもの」『分裂病の現象学』弘文堂、一九七五年。
- (4) C・G・ユング(一九三九)「意識、無意識、および個性化」『個性化とマンガラ』みすず書房、一九九一年、五
三〜五四頁。
- (5) K・ローレンツ(一九三五)「鳥の環境世界における仲間」『動物行動学Ⅰ』丘直通・日高敏隆訳、思索社、一九
八九年、三二四〜三二六頁。
- (6) ロラン・バルト(一九六七)『モードの体系——その言語表現による記号学的分析』佐藤信夫訳、みすず書房、一
九七二年、六頁。

謝 辞 小論の発表、および監修者コメントに対する議論の掲載について、前例のない形式であるにもかかわらず、快
くお引き受け頂いた河合文化教育研究所の加藤万里さんに心より感謝したい。